

取られる結果、偶然に生じるとの推測を否定し、蜂の更に積極的な獨房の直徑増加の習性を物語る資料となるのではなからうか。又一般に

The pithy portion of the twigs is 4-5 mm. in width while the burrow about 2 mm., consequently the latter runs sinuously in the pith.

も認め得るであらう。

獲物は黄、緑、褐色等を呈する小型の頸吻同翅類で、決して1種ではない。江崎悌三教授の御同定を煩はした所、若蟲で屬種の同定は不可能であるとの事であつた。

The preserved preys I examined were 277 nymphs, which belonged to several species of Jassidae and 1-3 mm. long. They were completely paralyzed and never responded to the pin-sticking stimulus although not so rapidly dried up.

1獨房に85~90頭も貯藏されると言ふ事は從來日本の狩獵蜂で見られなかつた大きい貯藏頭數の例である。上記の巢で卵を發見出来なかつた事は本種の卵が乾燥に耐へ難いものである事を示すのではないかと思ふ。併し(B)巢の検査で卵の見出されないのは明に蜂が貯食を殆ど終つてから産卵するのを暗示するであらう。最後に幼蟲について追記すれば

The fullgrown larva spins a thick, hard, tray-like cell-lid or cocoon, brown in color, to protect itself and hibernates in larval condition.

此の繭の造り方等は明白に本屬の特色を示してゐる。

最後に同定をお願いした江崎教授並びに、安松京三氏に深謝の意を表す。

ツノアカヤマアリの新産地

安松京三

1934年寺西朝氏は關西昆蟲學雜誌, vol. 2, no. 2 にツノアカヤマアリ *Formica exsecta* var. *fukaii* Wheeler の分布に就いて論述されたが、將來の發見地に對する豫想として次の如く記された。

前記の如くツノアカヤマアリの關西地方に於ける分布の尙相當濃厚な點から見れば、今少し西南方の地に新産地が發見されるであらうと推測して差し支へない様に思ふ。中國山脈は最も有力な候補地である。唯鳥取縣の大山及び山口縣と島根縣との境近くの高島附近での私の調査の範圍ではまだ見付からない。

本年8月私は宮本正一氏から多數の膜翅目の標本を頂戴したが、その中に中西武氏の採集になる3頭のツノアカヤマアリを見出した。それらは1939年6月3日に備後國道後山で發見されたもので、これによつて從來のツノアカヤマアリの分布の西限が更に西方に移動されることになつた。よつて本誌の餘白を利用してその新産地を紹介し、宮本正一・中西武兩氏に敬意を表したい。